日本書道史

第3講「天平の書と中国書法」

住川 英明（岐阜女子大学）

第3講「天平の書と中国書法」

【学習到達目標】

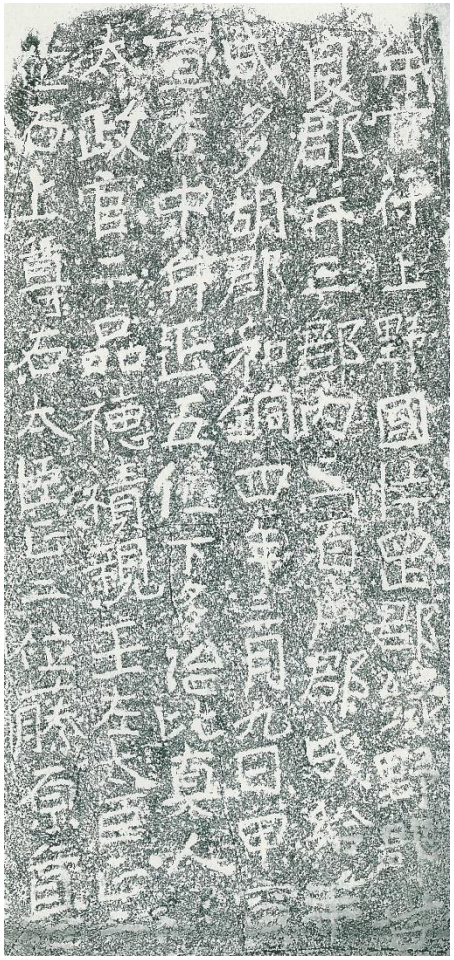
- 《多胡碑》などの石刻書風について，概括的に説明することができる.
- 万葉仮名が広く行われるようになった状況について，正倉院文書等の当時の文字資料にもとづいて，概括的に説明することができる.
- 王羲之書法の受容の状況について，当時伝来した摸搨本等により，具体的に説明することができる.

第3講「天平の書と中国書法」

１．上代の金石文字資料

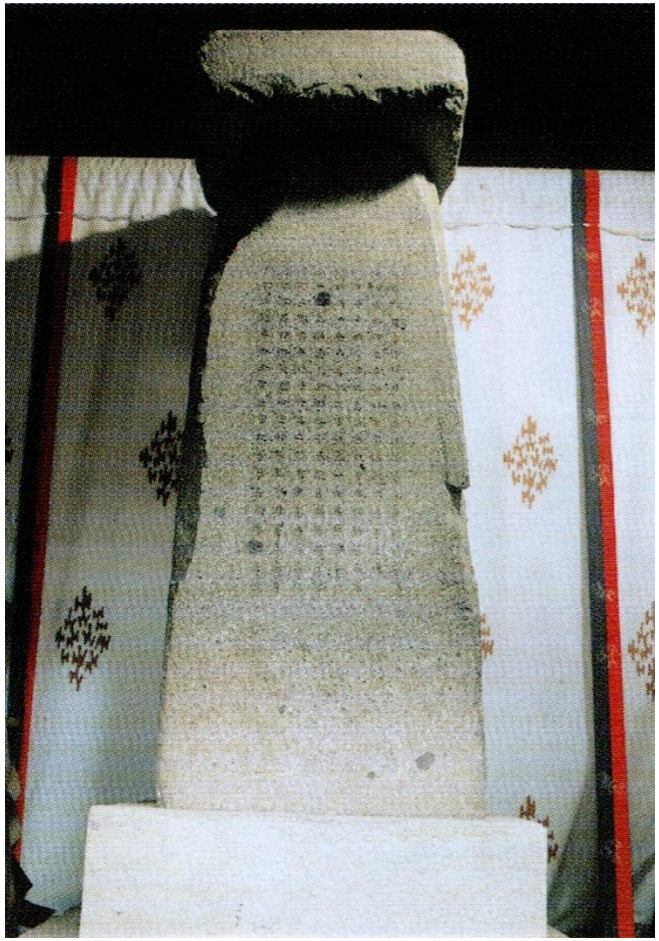
- 飛鳥時代から奈良時代にかけては，碑や墓誌などの金石文字資料が，多数遺されている.
- いずれも力感のある，素朴な楷書体で記されていることが多く，石質の粗さなども相まって，一種の柔らかさや穏やかさが感じられる.

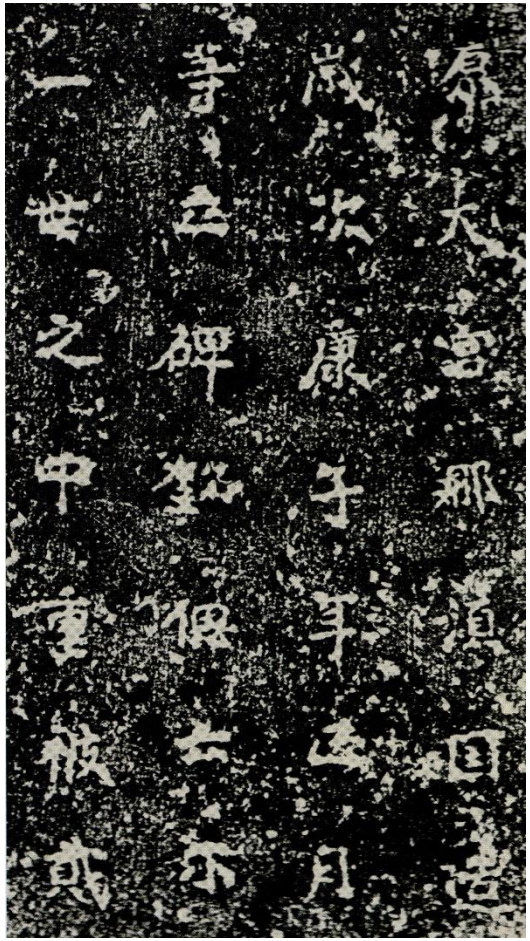
第3講「天平の書と中国書法」



《多胡碑》（全套本と全景）

第3講「天平の書と中国書法」





《那須国造碑》（部分拓本と全景）

第3講「天平の書と中国書法」

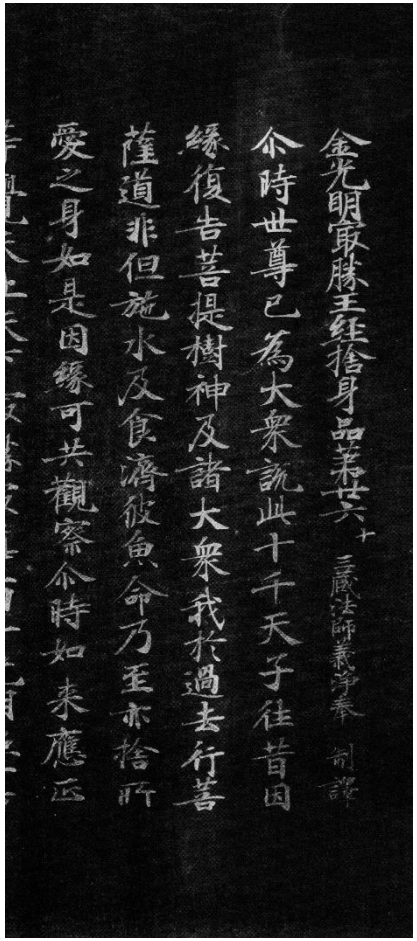
《多賀城碑》（全套本と全景）

第3講「天平の書と中国書法」

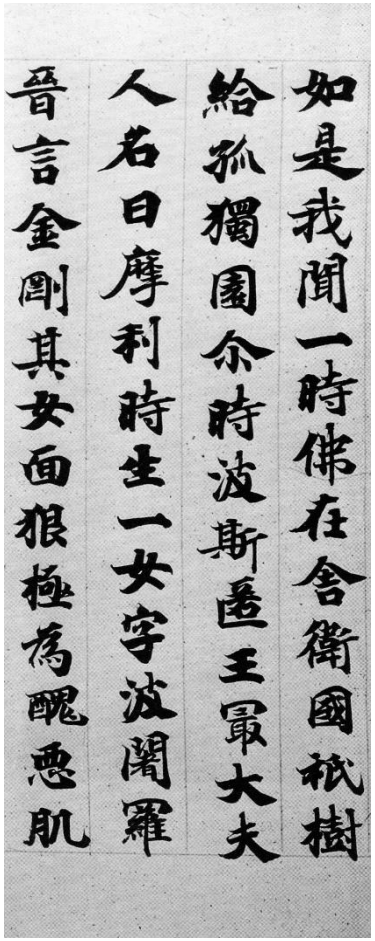
2．仏教文化と写経の盛行

- 仏教によって国を鎮めようと考えたことから，東大寺大仏の鋳造や国分寺・国分尼寺の造立，経典の普及や写経の書写などが盛んに行われた．
- 国家的な事業として，優秀な写経生らの手によって，天平写経が書写された．それらは，唐風の端正な楷書体で書かれている．

第3講「天平の書と中国書法」



《紫紙金字金光明最勝王経》（部分）



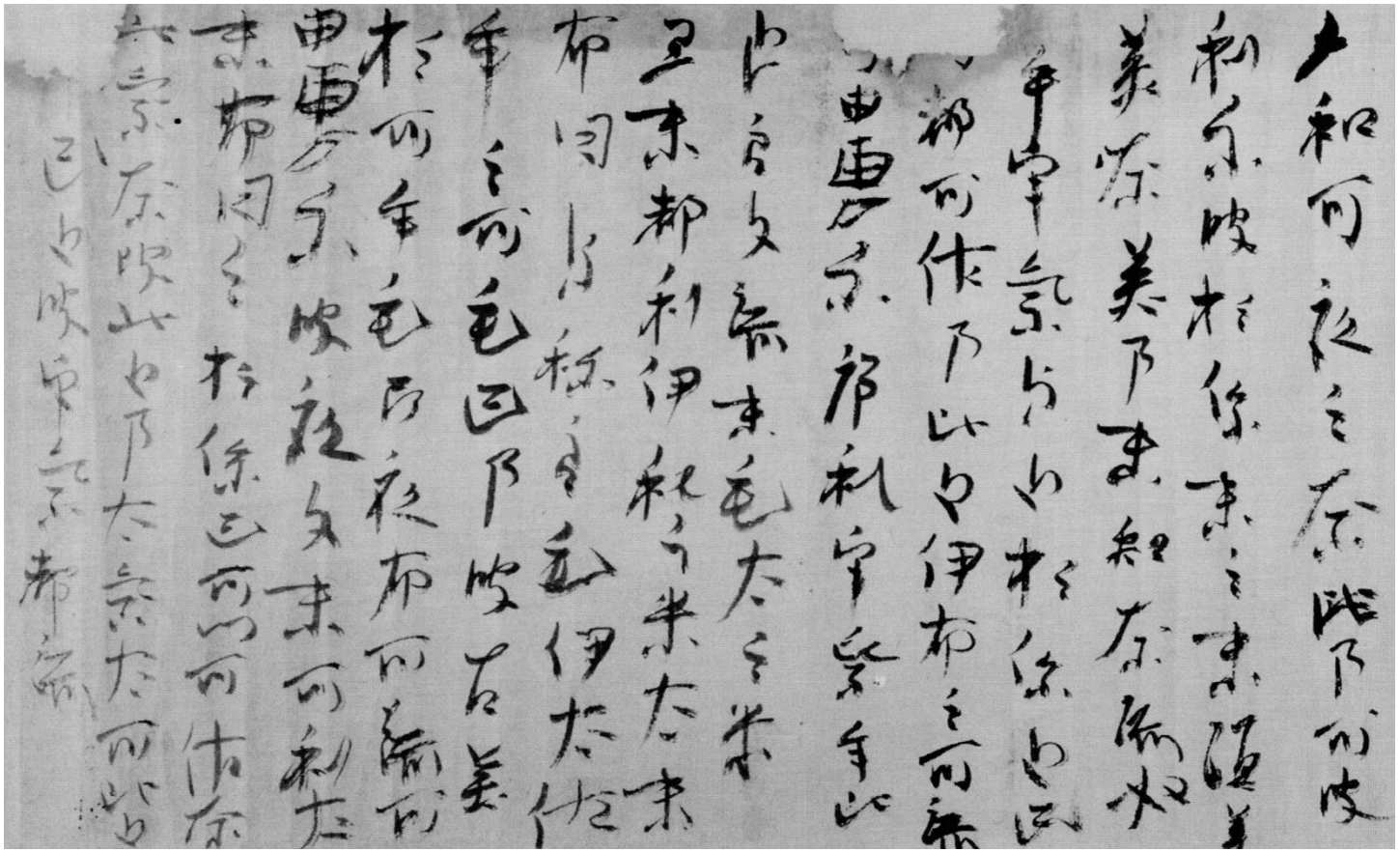
《賢愚経（大聖武）》（部分）

第3講「天平の書と中国書法」

3．万葉仮名による日本語表記

- 万葉仮名による表記は，固有名詞から始まり，最終的には文中の全音節をそれぞれ一字の万葉仮名によって表記するようになった（一字一音表記）．
- 1つの音が複数の文字をもつ万葉仮名のシステムは長く続き，現在の一字一音の平仮名になったのは，明治33年（1900）に「小学校令施行規則」が発令されてからである．

第3講「天平の書と中国書法」



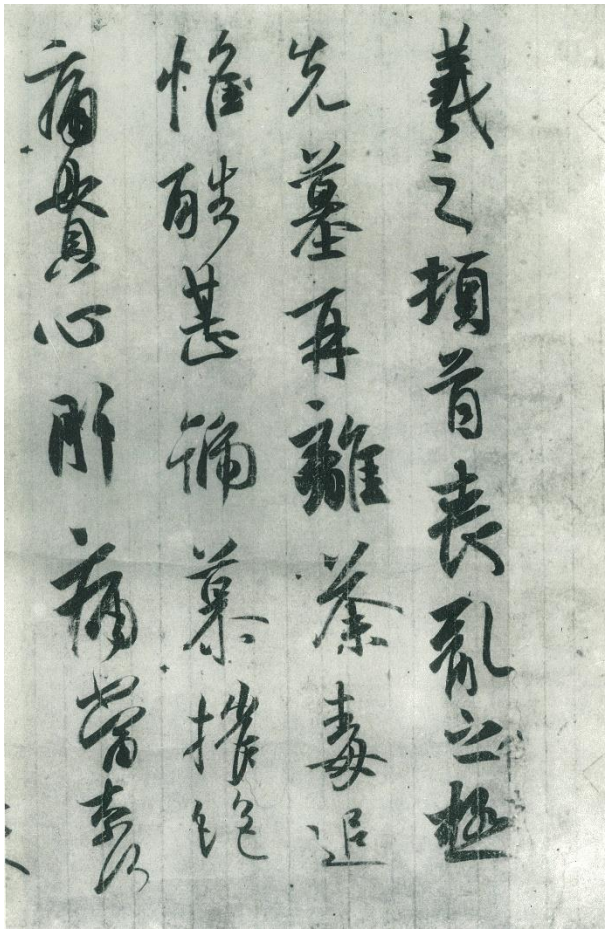
《正倉院万葉仮名文書》（部分）

第3講「天平の書と中国書法」

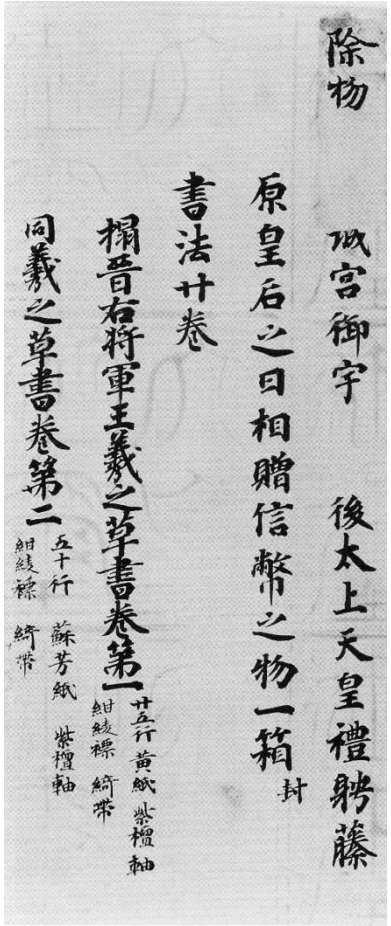
4. 王羲之書法の受容

- 《東大寺献物帳》には，王羲之の書が20件も列挙されており，当時中国から王羲之の書の複製が数多く流入していたことがわかる.
- 光明皇后が王羲之の書を臨書したとされる《楽毅論》が伝来することから，王羲之の書が実際に臨書され，愛好されていたらしいことが想像できる.

第3講「天平の書と中国書法」



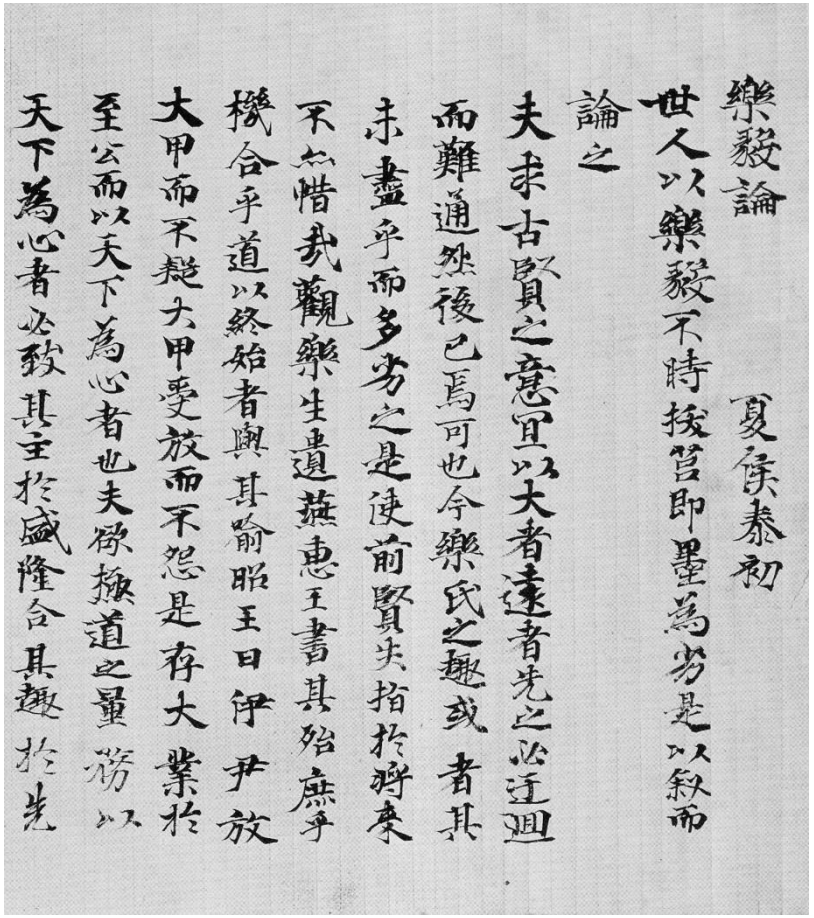
王羲之《喪乱帖》（部分）



除物　　後太上天皇禮躬藤
原皇后之日相贈信幣之物一箱封
書法廿卷
搨晉右將軍王羲之草書卷第一　廿五行　黄紙　紫檀軸　紺綾標　綺帶
同羲之草書卷第二　五十行　蘇芳紙　紫檀軸　紺綾標　綺帶

《東大寺献物帳》（部分）

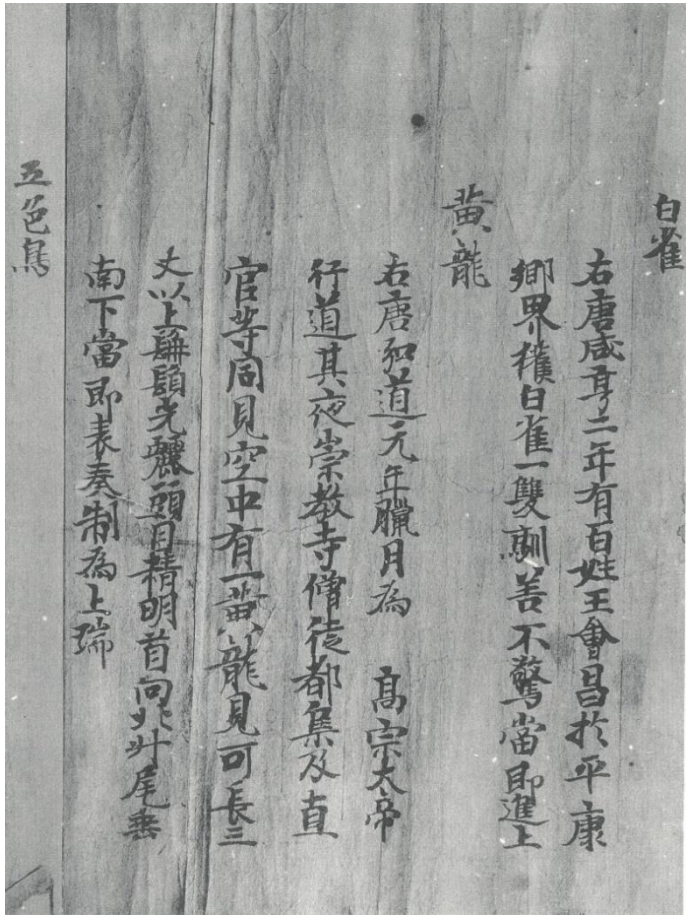
第3講「天平の書と中国書法」



樂毅論　夏侯泰初

世人以樂毅不時授管即墨爲劣是以叙而
論之
夫求古賢之意宜以大者遠者先之必迂迴
而難通然後已焉可也今樂氏之趣或者其
未盡乎而多劣之是使前賢失指於將來
不亦惜哉觀樂生遺燕惠王書其殆庶乎
機合乎道以終始者與其喻昭王曰伊尹放
大甲而不疑大甲受放而不怨是存大業於
至公而以天下爲心者也夫欲擬道之量務以
天下爲心者必致其主於盛隆合其趣於先

光明皇后《楽毅論》（部分）



白雀

右唐咸亨二年有百姓王會昌於平康
鄉界獲白雀一雙剋善不驚當即進上

黄龍

右唐貞觀元年臘月爲　高宗大帝
行道其夜崇敬寺僧徒都集及直
官等同見空中有黄龍見可長三
丈以上鬣頭光耀頭目精明首向北叶尾垂
南下當即表奏制爲上瑞

五色鳥

《沙州図経》（部分）

課　題

１．光明皇后《楽毅論》の書風について，当時における王羲之書法の受容と関連づけて，考察しなさい.

第3講「天平の書と中国書法」

【学習到達目標】

- 《多胡碑》などの石刻書風について，概括的に説明することができる.
- 万葉仮名が広く行われるようになった状況について，正倉院文書等の当時の文字資料にもとづいて，概括的に説明することができる.
- 王羲之書法の受容の状況について，当時伝来した摸搨本等により，具体的に説明することができる.

日本書道史

第3講「天平の書と中国書法」

住川 英明（岐阜女子大学）